

和二十一年六月頃までいました。南京を経由して六月中旬に上海を出発し、二十一年六月末に浦賀に復員してきました。上陸して復員局を出ると、ヤミ煙草やヤミ食事を売る物売りがいっぱいでした。アメリカ兵にぶら下がっている日本女性を見て「日本はもうこんな国になってしまったのか」と感じましたが、それ以外に復員の感慨はあまりありませんでした。

当時、実家は横浜市子安にあり、電車で二時間もあれば浦賀からは到着することができ、遠くに帰る人達に比べて気分的に楽でした。実家は戦災にもあわず、残っていました。召集前に勤めていた会社は厚生年金を支払ってくれていたもので、退職届けを出して新しい仕事を探すことになりました。私は気に食わなかったのですが、駐留軍の給料が相場の倍であったので、そこに十三年間勤めました。

中支軍の戦闘師団

幸兵団の一員として

愛知県 吉田 新一

昭和十二（一九三七）年八月十四日、支那事変勃発、毎日のように村には召集が来ました。昭和十六年十二月八日、大東亜戦争に突入、翌年十月十四日臨時召集を受けて名古屋中部十三部隊第二中隊神隊に入隊。時に二十八歳、初年兵で苦勞しました。

早朝五時に出発して東山より守山、小幡と汗を流して演習夕方五時に帰隊。検閲が終わる二日間帰宅休養の後、十二月十七日機密裏に中支方面に出征。真夜中機密裏に出発したにもかかわらず、名古屋駅には親戚衆が多数見送りに来ていました。どうして機密が洩れるのでしょうか、不思議です。

十二月十八日宇品港を出発、約十時間後に朝鮮釜山港に上陸。途中海は波高く、殆どの者が船酔いして食

事を取る者はありませんでした。

釜山より貨車に詰められ北支周りで中支に向かいましたが、時あたかも十二月でしたから北支は寒く、外は零下何十度で貨車の扉は凍り付いて開きませんでしたので、用便は汚い話ですが貨車の中で済ませましたから、貨車の中は異様な匂いがたちこめていました。

南京で二日間の休養の後、十二月二十六日、漢口より汽車に乗り広水で下車、休む暇もなく応山に向かって行軍、師団司令部で杉崎中尉に受領されて連隊本部に着くなり営庭に装具を下ろさせられ、早速裏の防共山の望楼を駆け足で回ってきて早い者順に一列に並ぶように言われました。私は息も絶え絶えでしたが頑張って二番目でした。五番目までは連隊本部に残り、それ以下の者は中隊の受領者にそれぞれ引き渡されました。その時はちょうど第三次大別山作戦の残留中でした。

大別山作戦も終わり、昭和十八年二月十六日、本隊

が帰って来たその日より毎日忙しい初年兵時代が始まりました。古兵の衣服の洗濯、食事の準備、後片付けと本来の任務以外に初年兵特有の仕事が山積し、それはそれは忙しい毎日で嫌になってしまいました。とても私には軍隊は向かないと思いました。

その後、例の一中隊事件があり、私も営倉の衛兵勤務の為に東門街の教育隊に一日おき位にやらされました。中の者に今度来る時、煙草とマッチを持ってくるように言われましたので、その旨一緒に行った古兵に話したところ、本当はいかんのだが仕方がないから上官に見つからないようにコソソリ気を付けて渡すように言われました。そしてその次に行った時にその人に恐る恐る煙草とマッチを渡した覚えがあります。

二月一日、江北殲滅作戦に出発しました。私にとっではこれが初陣でした。十分間の小休止に馬にやる水を探して来ると、自分の休む時間は殆どありませんでした。昼の大休止にも飯盒の飯を食べながら馬の監視をしなければならず、また宿営地についてやれやれと言う暇もなく馬の手入れ、食事の支度、後片付け、夜

は不寝番と初年兵は休む暇などなく、やたらと忙しかったです。

江北作戦も終わり三月三十一日、懐かしの応山に帰ってきました。

翌日からは古兵の被服の洗濯、既当番、衛兵と、体の弱い者には本場に軍隊は辛い所です。初めての休養日に、戦友と城内に遊びに行き饅頭を食べていたら偶然にも同村出身の同級生に会いましたので、しばし懐かしい村の話題に花を咲かせ健闘を誓い合って別れました。

昔は輜重しちじゆうは前後を歩兵に護られて行動したのですが、これからは輜重も単独行動をとることになり、自隊の中に戦闘小隊を設けることになりました。そのため分隊の編成替えがあり、私は輸送分隊のいわゆる行李班こよりに回されました。分隊長は鈴木実兵長でした。

四月十六日、江南作戦参加のため応山を出発、その時はちょうど雨季で、来る日も来る日も毎日雨で、金玉まですぶ濡れて股ずれができて苦勞しました。宿営地に着くと綱を張り火を燃やして軍衣袴を乾かすのが

余分の仕事で、時々軍衣袴を裏返さなければならず、初年兵の我々はろくろく眠れませんでした。

作戦も終わり六月十二日に懐かしい応山に帰って来ました。当分の間案ができると思っていたら今度は服部中尉の当番を命ぜられました。当番兵は朝の点呼には出なくてもよいのですが、分隊にいた時よりも忙しく気疲れのする勤務内容でした。

七月四日は連隊の創立記念日にあたり、この日は中隊より我こそはと言う芸人が本部に集まって来て芸を競いました。その行事の中に銃剣術があり、私は本部を代表して個人の勝ち抜き戦に出て優勝し、賞品に清酒五本と饅頭五十個と鯛いいわの缶詰一箱をもらい、分隊員全員で飲んだり食ったりの大騒ぎをしました。もちろんその日は無礼講でした。

七月十日より服部中尉が鎮江補充馬廠に馬の教育に行くことになり、私も当番兵として一緒について行くことになりましたが、漢口の兵站到着すると同時に敵情が悪くなり、当分の間、漢口の兵站到駐すること

とになりました。その間補充兵が入れ代わり立ち代わり大勢漢口の兵站到り来て来ました。私は会う人ごとに「お前はどこから来たのか？」と聞きました。やはり故郷のことが気になるのですね。私の会った者の中に同郷の者が三人おりました。全然見たこともない知らない者ですが「体に気を付け元気でやれよ」と励ましてやりました。それだけの些細な短い言葉でしたが、言われた本人にとってはどんなにか心強く感じたことでしょう。

その後十月十日まで鎮江補充馬廠で馬の教育を受け、十八日応山に帰ってきました。

応山は常德作戦の残留中でしたが、中尉は帰り次第本隊に追及するようにと命令を受けていたので、直ちに本隊追及のために応山を出発しました。追及するに一日五〇キロ位進まなければならぬので、随分苦勞して漸く本隊に追及し、その後三日経って当番を交代しヤレヤレと一安心しました。

常德作戦は非常に敵情が悪い時が多く、昼間は敵弾が雨霰の如く飛んで来るので夜行軍で山の中に入り、

五日間も徴発に出られず、食料は底を突き、木の根や草を食べたこともありました。そんな時に山の中の藁の下にサツマイモの青い芽が出た種イモを見付けました。水がないので草で土をこすって食べたのですが、その美味しかったことは今でも忘れません。その時は世の中にこんな旨いものがあつたのかと思つた位でした。

山を下り公安の街に入る手前の渡河点では、敵機の雨霰のような機銃掃射を受けて十六人の戦死者を出しました。初めは友軍機だとばかり思っていましたから急に機銃掃射を受けた時は慌てました。もうとうに制空権は米軍に握られておりましたから、友軍機だと思ふこと自体が間違つていたわけでした。

川幅は八〇メートル位でしたが流れが急なので馬の首を川上に向けていても七〇メートルから八〇メートル下流に流されました。二キロメートルばかり下流で舟を徴発してきて対岸までロープを張り、流れが急なので舟はそのロープを伝わって対岸に荷物を運びました。まず戦死者、次に弾薬、書類、糧秣、各人の装具

の順でした。

戦死者の火葬は火が外部に漏れると敵襲を受ける危険があるので、民家の中で一晩かかって焼き、骨は貴重品と共に煙草の空き缶に詰め、三角布で戦友の首につり下げ、次の駐留地で師団司令部に渡すまで責任を持って持ち歩き、戦友と行動を共にしました。

十一月四日、師団司令部が敵に包囲され、我が輜重に援助に来るようにとの命令がありましたので、宮川中尉が後藤当番兵を連れて司令部に命令受領に出かけましたが、一時間も経たないうちに中尉が後藤君を馬に乗せて帰ってきました。聞けば後藤君が敵弾にやられたとのことでしたが、命令受領に行かなければなりませんから、そこで当番経験者の私に代わりに行つてこいとの命令でした。途中、宮川中尉が「お前はいつ召集されたのだ。女房はあるから」と聞くので「ハイ、私は十七年二月に結婚し、十月に召集されました」と答えると、宮川中尉は「それでは結婚してまだ八カ月ばかりか。新婚ホヤホヤだな。女房が恋しいだろう。後藤の二の舞いを踏むなよ」と優しく言ってく

れました。

お陰で無事命令受領を終え、同じ命令書を私は三八式騎兵銃の中に忍ばせ、中尉は拳銃のサックの中に入れ、無事帰隊し、連隊長に命令書を渡して状況を報告し、直ちに戦闘要員を編成して師団司令部の救出に向かいました。思った程のこともなく無事司令部は敵中を脱出することができました。

常徳に入る手前二キロ位の何の遮蔽物もない田圃の中で、敵機二機の猛烈な機銃掃射を受け、わが部隊も多大の被害を受けました。私も田圃にへばりついたらま

ま一歩も動けませんでしたが、常徳に入る手前で、友軍を誘導中の将校が敵の埋没した地雷を踏み、馬もろとも空中にはね飛ばされのを眼前で見ました。運が悪くて気の毒だなあーと思いましたが。常徳駐留中は何回となく敵機が襲来し爆弾投下もありました。その都度「南無阿弥陀物」を唱えましたが。何度もこれでもう駄目かと思いましたが、幸い命永らえることができました。

常德作戦も終わり、昭和十九年一月五日、久しぶりに懐かしい応山に帰ってきました。そして宮川中尉の当番も交替し、元の分隊に復帰しました。その時はもう私よりも新しい初年兵がいましたので、食事の支度や後片付けをしなくてもよくちょっと楽をしました。

応山の彼方三〇キロ向こうに随県という所があり、私の弟も現役でここの警備にあたっておりましたが、今度補充兵がきて内地に帰ることになり、応山にいる私に遠路わざわざ会いに来てくれました。その時に「俺はもう内地に帰るのでこれはいらぬから」と言って私物の冬の襦袢袴下を私に置いていきました。私の分隊の者は弟を私の兄貴だと勘違いし「吉田お前の兄さんは随分弟思いの兄貴だな」と言って羨ましがりました。野戦に一年でも長くいると貰禄がついて、弟が兄貴に見えるのではないのでしょうか？ 兄の私が弟に見られてしまいました。

四月二十九日、住み慣れた応山を後にしていつ果てるともしれない長い作戦の旅に出ました。所謂これが最後の作戦となった湘桂作戦であります。

漢陽、長沙、衡山、来陽、零陵、道県、全県、柱林、柳州、宜山、思恩、思蓮郷と中南支を勝にかけて、よくも歩いたものだと思ながら感心します。応山を出発して八カ月七、八〇センチの歩幅で一歩一歩あるいても何億万歩となれば正に塵も積もれば山となるで、この広い中国大陸を何千里となく歩いたことなるのです。

最後に広西省の南寧で特務班勤務を命ぜられ、当分の間良民証の係で最初は老人、次から次へと庶民の面倒を見ました。通訳二人を含む七人の勤務でした。仕事は野菜、糧秣を良民より買入れ各中隊に配給するのが任務でした。

休養日のある日のこと、良民街の市場で、長椅子に腰掛け中国人の作った餅を食べていたら、本隊へ追及する兵隊が三々五々前を通過して行きました。その中に見たことのある者がいると思ったら、先方から「吉田さんですか？」と遠慮勝ちに尋ねてきました。聞いて見ると、隣村の安井と言う者でしたが、まさかこんな所で知っている者に会うとは夢にも思いませんでした。

た。餅を腹いっぱい食べながら懐かしい故郷の話をして行きました。

「本隊はもうすぐそこだから、もう少し頑張れよ。体に気を付けてな」と元気づけてやりましたら涙を流して喜んでいました。余程嬉しかったのでしょう。その後本人からは何の連絡もありませんでしたが、復員してから彼の家を訪ねたら戦死したとのことでした。運命とは本当に分からないものです。

南寧に駐留中は何回となく討伐に出ました。その都度戦死を覚悟しましたが、運よく一命を取り止めてきました。私と応山までずっと一緒に第一中隊に配属になった中島郡から出征してきた犬飼君は、この討伐中に、僕の目の前で敵の狙撃兵に狙撃されて戦死しました（都安作戦中）。

その後、内地の戦況が物凄く悪くなったと言うことで反転作戦に転じました。もちろん制空権は敵にあつたから米機の襲来が激しく、行動は夜に限られておりました。忘れもしません七月四日の夜明け、衡山県の

天門前と言う宿営地に着き、馬を遮蔽しようとして近くの森に入ったところ前の馬が、敵機より落下した風船爆弾の不発弾に触れ、その爆弾の破裂した破片で三人が負傷しました。その三人の中の一人が私だったので、膝から下は血で真っ赤に染まっていました。それを見た瞬間、そのショックと痛さで腰が抜けもう一歩も歩けませんでした。直ちに衛生兵に連絡し入院することになりました。

病院と言っても汚い民家の戸板に寝かされるだけでした。全然歩くことはできませんでしたので、尿小便の始末から三度三度の食事まで、全部衛生兵の世話にならなければなりませんでした。

八月十五日、歩ける者は集まるようにとの回覧が回ってきましたが、私は歩けないので行きませんでした。それは天皇の終戦についての玉音放送でした。戦友より「日本は戦争に負け、本日、天皇より終戦の詔勅が出た」と聞いて情けなくて情けなくて涙が出て止まりませんでした。

その後担架に載せられ、序々に後方に移動して、岳陽で右下腿部が化膿してきたので黄岡の病院に入院し、破片摘出の切開手術を受けることになりました。麻酔薬も無く衛生兵が三人が馬乗りになっての切開手術ですからその痛いことは筆舌にはつくせませんでした。あとで寝かされた戸板を見たら、冷や汗で戸板が人間の形にビッシヨリ濡れていましたから、さぞかし痛かったのを死ぬ思いで我慢したのでしょう。

風呂にも入れず体は汚れ放題で蚤は湧き、その内に回帰熱の高熱が一週間も続き、もうこれでいよいよ駄目かと思いましたが、恋しい女房の顔が浮かんできて、「新一しっかりしろ、頑張れ」と耳元でお袋がしきりに囁いているではありませんか、夢幻の中の出来事です。これが靈感と言うものでしょうか？ 運が強いというのかキニーネを十粒程衛生兵にもらって飲んで、その内に徐々に熱も下がり元気になってきました。

日が経つに従って回復し、どうにか杖をつけて外を散歩できるまでになりましたが、何しろ戦争に負け食

事の給与が中国側ですので、質も悪く量も至って少ないから腹が減ってたまりませんでした。

ある時、足をひき外に出たら、田圃に、日本と言う鳥貝のような大きな貝がいっぱいおりましたので、採って来て中国人に見せたところ「シーサンブシン、ブシン」と言いましたが、腹が減って減ってたまりませんでしたから背に腹は代えられず、焼いて塩を付けて食べたところ美味かったことその味は忘れられませんでした。その晩、特別腹も痛くなりませんでしたから中国人が「シーサン、ブシン、ブシン」と言ったのはこの地方の迷信だったのでしょう。

その後手術した足も順調によくまりましたので黄岡の病院から上海陸軍病院に転移し、そこに二十一年六月十日まで入院していました。この給与は相変わらず中国側で、量も少なく質も悪く朝夕二回限りでしたので、栄養失調による死者が毎日のように出ました。病院宮庭の南西隅に三坪位の穴が掘ってあり病死者はその穴に次から次へと埋めていかれました。私は内臓が丈夫だったお陰で足を引きながらも中国人の家に使

役に行き、食べる物をもらって腹を満たしておりましてから良かったです。

こうして日が経つ内に、内地帰還の命令が出て上海港より「興安丸」に乗り佐世保に帰って来ました。

従って懐かしい皆さんと一緒に帰還できなかったのが残念でした。

早速上陸できるかと思いきや、佐世保港内にコレラ発生と言う事故で一週間の上陸止め。船内には二日間の食料しか無いため二日分の食料で、一週間にカンパン一袋で一日食い繋ぎました。

ようやく上陸。援護課に入り、一通りの検査を受けました。その折、同船で一緒に上陸した病院行きの兵隊の中に隣部落の兵がおり、無事上陸されたら家に連絡をして欲しいと頼まれていましたので、郵便局に行きました。実状を話し電報を打とうと思い、局員にお金が無ければ後日払うからと言いましたところ、「引揚者なら靴下を持っていてでしょう、それで電報を打ちなさい」と言われました。本当に情けないと思いました。

翌日朝食後、召集解除、各地区に帰還しました。国鉄に乗車する前に約二時間の猶予が有り、援護課の外を見ておきますと、大変な人が一列になって並んでおりますので何かと尋ねますと、煙草を買う人と聞きました。援護課より二百円戴いたお金があるので自分達も買う心算で列に並んで二個買いました。買った煙草は「光り」十本入り一個五十円で、あまりの桁違いに啞然としました。我々十七年に応召を受けた時「ゴールドエンバット」一個金六銭でした。時代が変わったと言え日本は敗戦国、頭の中が変になりました。そしてその足で列車に乗りました。

引揚列車ではなく次から次へ、窓から荷物が入るだけ積み込みます。聞けば当時買い出し列車と聞きました。着いた所が広島駅でした。三十分停車と言うことで外を眺めておきますと、次から次へと人が往き来します。何かと聞きますと竹の皮に包んだオニギリ二個入り百円とのこと、自分達も腹がすいていたので買って列車の中で食べましたが食べられた物ではありませんでした。それは粉糠にでんぶん少々で硬めた塩

味のものでした。一個は食べ、一個は土産として家まで持って帰りました。

名古屋駅に着き下車致しますと、私は両足を引いておりますので電車に乗る予定でしたが電車は無く、駅前で更生車に乗ってくれと申しますが金は無く、名古屋駅より両足を引きながら帰宅致しました。

当家の入口で、今は他界されましたが当時八十歳位でした方に「まあ無事帰られて良かった」と言われ、そこでお母さんが居られるのなら喜ばれるのになあと言われました。我が家に着きましたが家は農家ですので翌日田植えということで弟妹が腰から下がびしょぬれで迎えてくれました。母親はと聞きますと、お母さんは仏壇の中と申しますので家上がり、早速仏壇に手を合わせ無事で帰った事を報告した次第です。

翌日足を引きながら一日中田植えをし、家に帰り、疲れた体で隣近所に復員の挨拶やらお礼回りをして床に就きました。

次の日は役場に行き村長にお世話になったお礼を申しました。帰宅に際し村長から配給米をもらってくれ

るようにと言われますので、係の方より二升七合のチケットを頂きました。この配給米は今月分かと尋ねますと来月分だといわれました。これだけでどうして食べて行けるのかと尋ねましたところ、一般の人と同じ配給だから宜しくといわれました。我が家は農家ですから食べる物は充分にあると思っておりましたが、如何せん戦争直後で食糧事情悪く、農家でありながら供出が厳しく、我が家では先年母親は他界、父親は幼ない子供三人の面倒を見て田畑は荒れ放題、採れる物は人並みに取れず供出は人並みに出荷しますので残り無しということ、その年は夢の間に暮れました。

二年目に入り役員を引き受け、一年おきにいろいろの役職を仰せつかり、頑張りました。この中で我ながら一番苦労したのが更生保護司の仕事でした。引き受ける時は吉田町長との約束で一期二年と言う事で受けました。中でも一番難しい対象者は頭の良い、自分の事だけ考えて人の事は考えない不良青年でした。保護司の仕事は街の役員ではなく法務大臣より任命された役員ですから他人には絶対話はできません。家庭内で

も話はず本当に苦勞しました。その間には刑務所にも何回となく足を運びました。一番困ったのは福井刑務所入所の一人と岐阜刑務所に入所した者でした。内容については書き残せません。

また、困ったのは月に一回は来訪し自分の月内の出来事とか何に勤務したかの報告にこななければならないのに、来訪のない対象者には往訪すると勝手な話ばかりです。何とか立ち直らせたければかりに一心でした。その間に身銭を使ったことも度々でした。後になって自分ながら反省する面もあり、我ながら一応の社会人になれたなと思いました。一番の喜びは今もって対象者の両親よりこれは先生のお陰ですと喜んでくれることで、道で会った場合に先生お元気ですかと話し掛けてくれる者もあります。

昭和二十四年には我が国は敗戦国なるが故に軍人恩給も一時停止になりましたが、三年後には恩給が復旧致しました。しかし我々は少々年限が足りない恩給欠格者として運動を始めたのですが仲々受け入れてくれませんでした。昭和六十三年によく平和祈念事

業特別基金法ができて、内閣総理大臣より書状と銀杯など慰勞の品も贈呈されるようになりました。

また、我が国が中支に出征した折、親戚の方から餞別をたくさん頂き、社内で数えたら金二百八十円あった金も中支では使用できないと言う事で全部貯金し、また月々の俸給から少しずつでも貯金をしておりました。しかしこれも最後の湘桂作戦中に監視兵が、敵襲に遭い全書類を焼却したと言う事で補償になる物は一つありません。

恩欠連に加入して二十年になります。ようやく一部の議員さんより恩欠者にもある程度の国債にて渡したらと言うこともききました。私は軍人恩給に一、五カ月不足、傷害者としていまだ左膝関節内に榴弾受けながらも何の補償も受けておりません。残念でなりません。